幽霊に恋した男の子

俳人

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ホグワーツ魔法魔術学校。

ある男の子の話をしよう。

「すきです!!!つきあってくださいっっ！」

「嫌です」

出会って５秒で告白して、２秒でフラれた。そんな、哀れな男、幽霊に恋した男の話を始めよう

目次

第1話 …… 1
2話 …… 7

第1話

キングスクロス駅。魔法使いの卵達が、魔法魔術学校ホグワーツへ学びに行くために作られた電車の駅である。

駅構内では様々な魔法使いの親子が、これからの生活を語りあっていた。

「……　憂鬱だ」

この俺、　ケヴィン・アレスティンもまた今年からホグワーツ1年生という訳だ。

俺もまた父とともに生活用品、　――ほぼ本だが、が入ったトランクを転がし父ともに語っていた。

「まあまあ、行ってみるといいところだぞ?ご飯はうまいし、仲のいい友人もできる、なにより魔法を学ぶのにあれほど素晴らしい場所はない！」

「父さん、学ぶだけなら、うちの図書館でもできるだろ」

やれやれ、といった顔をして父はケヴィンの頭に手を置いた。

「はあ、お前を図書館から外を出さなかったのも悪いんだろうな…」

「父さん!!」

「本のなかでは学べないことがホグワーツではたくさんある、……　恋とかな」

そう言って父はぱちりとウィンクをした。……　うへぇ。
「おっさん、気づけ、恥ずかしいこといってんぞ」
「……　とにかくだ、ホグワーツでひとり好きな女の子を作ること、帰ってくるまでに、一人はだ、もし出来なかったら……　図書館入館禁止!!!!」
そう言って、俺に杖を振り上げ無理矢理電車に乗せた。
「いや、ちょっとまてええええええええ!!!」
電車は唸りをあげ、ゆっくりゆっくりと進んでいった。
「ここ、すわってもいい?」
さらりと流れるブロンドの髪に、真っ白い肌。そして、ごてごてした変な服を着た女の子。
「なんだ、ルーナか」
「なんだとは失礼なんだな」
そう言って、ルーナは俺の返答を聞く前に向かいの席に座ってきた。
ルーナ・ラブグッド。父親は雑誌編集長をしており、よく取材の情報収集でうちの図書館に来ていた。それの付き添いでルーナとはよく顔を合わせていた。ジッとルーナの顔見見つめながら言った。
「……　なあ、ルーナ、俺はお前を好きなんだろうか」

「それを私に聞いてるところでダメだと思うな」
　そう言ってプイと顔を背け、窓を眺めていた。俺もコイツのことは昔から知っているが、異性として見たことはなかった。
「はあ、好きな人なぁ…」
「どうしたの?」
　ポツリポツリとルーナに、父に言われたことを語った。
「ふーん、お父さんも心配なんだね」
「心配っていうかなぁ…」
「まあ、意外と早く見つかるかもしれないよ」
　そう言って、カエルチョコを開けた。
「そういや、ルーナはいきたい寮とかあるのか?」
「んー、多分だけどレイブンクローだと思うな、うちの家族はみんなレイブンクローなんだもん」
「あー、それで行くと俺もレイブンクローかね、あー、たぶんだけどレイブンクローに好みの女の子なんていねえよ…」
「それは私にも失礼なんだな…」
　ルーナはムッとした声で呟いた。

実際のところ、この言葉は半分合っていた。しかし、もう半分は間違っていたと言うほかないだろう。俺もこのとき、恋愛にそこまでお熱になるとは思わなかったんだから。

そこからは、トランクの本を何冊か取り出し、ルーナも勝手にそれをとって、好きに読んでいた。

そんな静寂の時間は、突如開かれたコンパートメントの扉を開ける音によって壊された。

「今年はおかしな雑誌の家のやつがホグワーツに来てるってホントなんだな」

ブロンドの髪を輝かせた、不気味なほど青白い肌の少年。俺はこの少年を知っている。

「なんのようだ、ドラコ・マルフォイ……」

後ろのデカイ取り巻き二人は瞳をギョロギョロと動かし、こちらをせせら笑った。

「ここでは『さん』をつけろよ、アレスティン、年長者なんだからな」

嫌味たらしくドラコは笑い、言った。

「まあ、しかしアレスティン、君は聖２８氏族ではないが純血の家系だ、こっちのコンパートメントに来るといい、歓迎するよ」

「俺を誘いたかったら、もう少しロマンチックで詩的な言葉を探すんだな」

「私は行ってもいいよ」
「ルーナ、ちょっとお口チャック」
そんなやり取りをしていると、青白い肌を徐々に赤らめ、目をかっ開いていた。
どうやら照れているようではないようだ。違うか、違うな。
「後悔するぞ、アレスティン！ハリー・ポッターのようにはならないことだな！行くぞ！」
ドラコは取り巻き二人を連れて、どこかへ行ってしまった。なにしに来たんだ、あいつ……。
「そうだ、一個上にはハリー・ポッターもいるんだったか」
ルーナはコテンと首をかしげ、考える仕草を取った。
「ハリー・ポッター…？」
「生き残った男の子だよ、お前の父さんの雑誌でもたまに出るだろ」
いや、まあ、クヴィラーにはマジでちょっとしか出てないが……。断然、しわしわ角なんとかの方が出ていることだろう。
そうこうしている内に車内ががやがやと賑わってきた。もうそろそろ、ホグワーツに着くらしい。
「さて、学校生活どうなるかねえ……」

ぼそりとケヴィンの口から、そんな言葉が出た。車窓を見ると、本の挿し絵でしか見たことのなかったホグワーツ城がそびえ立っていた。

学校生活や、新たな本に学友、そしてまだ見ぬ好きな人に思いを馳せながら

ケヴィンは本の頁に目を落とした。

2話

「イッチ年生！イッチ年生はこっちだ！さあ、集まれー！」
　電車を出ると、黒い髭をふさふさに蓄えた大男が一年生を集めていた。
「おお！アレスティンのちびっこじゃねえか！そうか、おめえも大きくなったな！」
「やあ、ハグリット、『怪物的な怪物の本　巨大版』の返却が遅れてるよ」
　そう言うと、ばつの悪そうな顔を俺に向けた。
「冗談だよ、父さんが『あれを借りたのはここ１００年で君ひとりだから貸し出し無期限にする』ってさ」
「ねえ、ケヴィン、わたしの書いた『しわしわ角冒険憚』はいつ図書館に置いてくれるの？」
「・・・あれは、あれでどうにかするよ」
　そんなやり取りを見てハグリットは大きく、ゴツゴツした手を俺たちの頭に置いてガシガシと撫でた。
「さあ、イッチ年生！しっかりついてこい！こっちだ！」
　野太いハグリットの声に着いていき、ホグワーツへ向かった。

「皆さんは、これよりホグワーツへ入学します。まずは…」
　変身術を教えているマクゴナガル先生は生徒を集め、これからの話をしてくれた。全寮制なぁ……、仲いい子見つかるかなぁ…。
「では、これより組分けの儀式を始めますので、皆さん食堂へ」
　そう言うとザワザワしながら生徒の列は動き出した。
「そういえば、ルーナ組分けの儀式ってなにするか知ってるか」
「知らない、パパはお前は絶対にレイブンクローだとしか」
　そんな話をしていると、食堂の扉の前につき、マクゴナガル先生がその扉を開いた。
「へえ……　いいじゃないか」
　ふと小さくそんな言葉が漏れてしまった。
　食堂は、とても長い机が4つ並んでおり、奥にはそれぞれの寮の紋章が掲げられていた。なにより目を引くのは天井だ。幾百もの蝋燭が魔法でフヨフヨと浮かされており、その奥には、深い深い夜の青に、いくつもの星々が瞬いている。
　不覚にも、魔法で創られた星空に見とれていた。そんな俺の様子を見てルーナが、小さく笑っていた。
「……　なんだよ」

「いや、なんだかんだ言って気に入ってるなぁって」
そんなルーナを無言でチョップし、マクゴナガル先生が話を始めた。
「皆さんには、この帽子をかぶってもらいます、この組分け帽子が皆さんの寮を決めることでしょう」
そういって、マクゴナガル先生は古びた帽子を、置いた。
おお、すげえ。なんか歌ってる。
「では、名前を呼ばれたものは前へ」
そう言って一人一人名前を呼ばれ、帽子を被らされる。人によってはすぐ決めるが、熟考した末に決める場合もあった。
「次、ケヴィン・アレスティン」
マクゴナガル先生に呼ばれ、つい背筋を伸ばしてしまう。……　さっきドラコに大口叩いたし、スリザリンじゃないといいんだが…。
「なあ、アレスティンって…」
「アレスティン魔法大図書館の子…？」
ひそひそとそんな会話が耳に入る。うちは名前は有名だが、入る人は限られるからなぁ…、中に関して憶測が出るものだ。意外と中は普通なんだけどね。
前にいくと、長い髪を蓄えた先生。アルバス・ダンブルドア校長と目が合う。半月形

の眼鏡の奥の瞳は、知的に輝いている。この人、たまにうちにいるけど苦手なんだよなぁ……。全部を見透かしてるみたいな感じがして…。

校長にペコリと頭を下げて、椅子に座り、組分け帽子をかぶった。

「おお、そうかアレスティンの家の子か…、君の家系はいつも少し悩むのだよ、知識に富んでいるので様々な可能性に溢れている、しかし、いつも選択は同じなのだよ、……１０００年前のあの日からね」

「あー、それって、どういう…」

「レイブンクロー!!」

拍手がレイブンクローの食卓から上がり、帽子が外された。すこし疑問が一つ残りつつも、レイブンクローの席へ向かった。

その後も、問題なく組分けは進められた。ちなみにルーナもレイブンクローだった。

組分けが終わると、ダンブルドアは教員席から立ち上がった。

「では一言、わっしょい、わっしょい!」

それだけ言うと杖を一振りし、食卓にご馳走が現れた。

「腹を膨らませるのじゃ!」

髭を撫でながら、嬉しそうに笑った。

「う……、もう食えん…」

「ねえ、ケヴィン、そのゼリーもらっていい？」
そう言ってルーナが俺のゼリーをかっぱらっていった。元々、そこまで食べる方ではないのだが、ここの食事が美味しいので食べ過ぎてしまった。
細々とカボチャジュースを飲みつつ、周りを見渡すが皆、まだまだ食べている。
「ん？あれは…」
窓を見ると、教師に首根っこを捕まえられる二人の生徒がいた。一人は燃えるような赤毛の男の子と、丸い眼鏡をかけた
黒髪の男の子だ。
「あれって、もしかして……」
「どうかしたのかな？ミスターアレスティン？」
後ろから静かに声をかけられる。振り替えると、ダンブルドア校長が優しげに笑っていた。……　いつからいたんだよ、この人。
「あー、ちょっとお腹いっぱいになりまして…」
「なんと、君の父君はドラゴンのような食べっぷりだったというのに
……　母君はその倍は食べていたが」
「母さんって、そんなだったんすか…」
ダンブルドアはゆっくりとうなずき、嬉しそうに笑った。

「食というのは、魔法の源じゃよ、たくさん食べねば、よい魔法は使えんからの」
「ハハ、腹減るように、たくさん勉強し……　ま、す、よ」
突如、ダンブルドアに向けていた愛想笑いが止まってしまい、言葉も止まってしまう。いや、それは俺にとって時が止まっていたのかもしれない。
食卓の喧騒も、遠く聞こえてしまう。それほど、視界に入った女性は衝撃的に美しかった。
「ミスターアレスティン。どうしたかの?」
「ケヴィン?具合悪い?」
ルーナや、ダンブルドアの声も、遠く聞こえる。俺は二人を無視して、食卓の上に立った。
「え!?」「なに!?」「おい、一年生、食卓の上に立つな!」
食卓の皿を避けるようにして、俺は彼女の方へ向かった。
「ひ、一目惚れです!付き合ってください!」
一瞬の沈黙、ダンブルドア、いや全校生徒の口がアングリとあいていた。
「嫌です、三回くらい生まれかわって出直してきてください」
そう言って彼女、レイブンクローのゴースト『灰色のレディ』ヘレナ・レイブンクローは無表情で、どこかへ消えていった。

俺の学校生活は、奇妙なスタートダッシュを切った。